

城北労働・福祉センター利用者実態調査報告書 ～変わりゆく山谷の今～ （平成22年5月）

第1部 利用者調査（センター利用者カード所持者）

I 調査の概要

(1) 目的

山谷地域に居住する日雇労働者に対して実施する支援をより効果的に行い、利用者一人ひとりの実情に応じた自立の促進と生活の安定を図るための基礎資料とする。

(2) 実施期間

平成21年10月1日から同年11月30日まで

(3) 調査方法

職員による面接調査

(4) 調査回答者

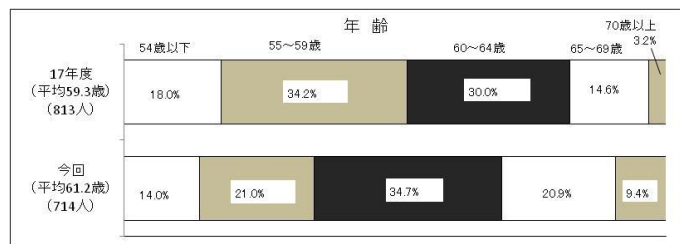
生活相談や職業紹介等でセンターを利用する者（利用者カード所持者） 714人
実施期間中来所者数（1,181人）に対する実施率 60.5%

II 調査結果

1 生活

【平均年齢は61.2歳】

4年前と比較すると2歳ほど上昇。

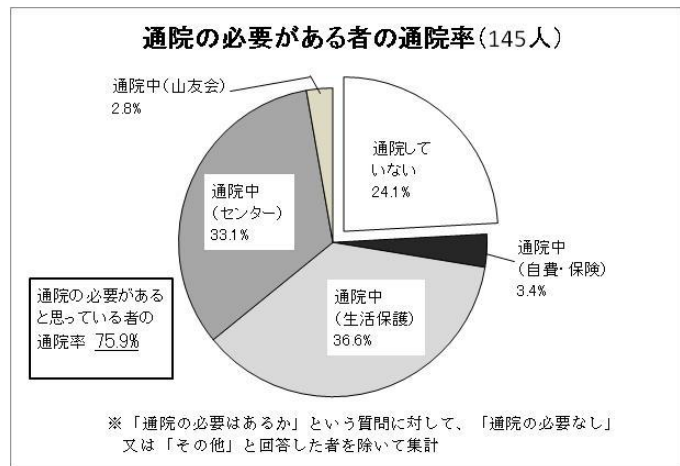


【健康状態】

「あまり良くない」「不良」と回答した者は約3割。

【通院】

通院の必要があると思っている者のうち、実際に通院している割合は75.9%。



【診療機関】

体調が悪い時にみてもらうところは、「センターの健康相談室」が65.8%と圧倒的に多い。

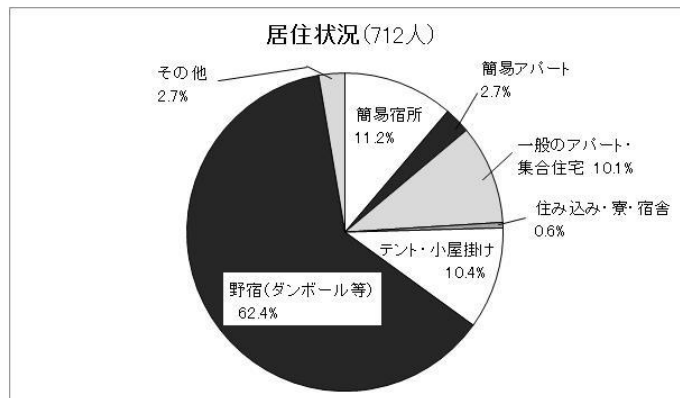
【山谷居住歴は5年以上が大半】

山谷地域での居住歴は、5年以上が76.9%と大半を占め、1年未満は8.5%。



【野宿率は7割】

住居形態は、野宿（「テント・小屋掛け」と「野宿（ダンボール等）」の合計）の割合が72.8%。
生活保護受給者を除くと83.0%。



【住民登録しているのは2割】

住民登録を「現在の居住地に登録している」は20.8%。
生活保護受給者を除くと11.2%。

【食事の調達方法】

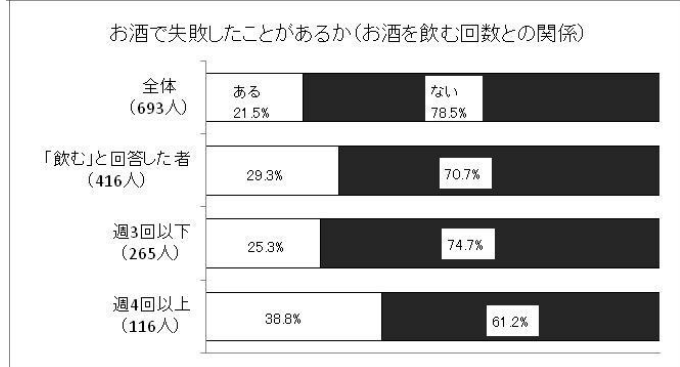
「炊き出し」や「センターの給食援護」の割合が高く、平均利用回数は、給食援護が週2.0回、炊き出しは週3.5回。

| | 17年度調査 | | 有効回答数 | 今回調査 | | 有効回答数 |
|-----------|--------|-------|-------|------|-------|-------|
| | 集計 | 割合 | | 集計 | 割合 | |
| 食堂 | 161 | 20.1% | 801 | 121 | 19.5% | 621 |
| コンビニ等から購入 | 370 | 46.2% | 801 | 300 | 48.3% | 621 |
| 炊き出し | 517 | 64.5% | 801 | 418 | 67.3% | 621 |
| センター給食援護 | 475 | 59.3% | 801 | 347 | 55.9% | 621 |
| 仲間の差し入れ | 86 | 10.7% | 801 | 83 | 13.4% | 621 |
| 期限切れの食品 | 32 | 4.0% | 801 | 17 | 2.7% | 621 |
| その他 | 115 | 14.4% | 801 | 104 | 16.7% | 621 |

※複数回答可
※生活保護受給中の者を除く

【お酒を飲んでいるのは6割】

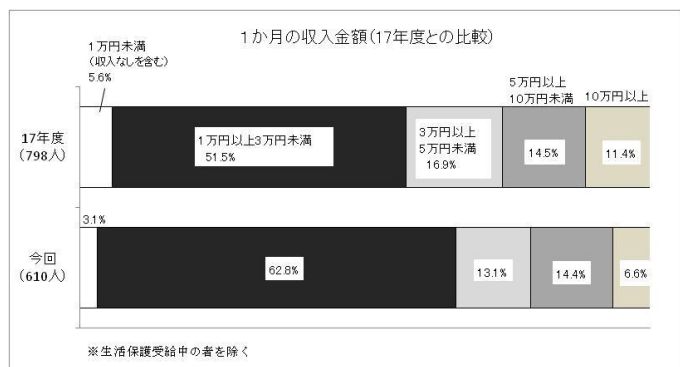
飲酒については、「飲む」と回答した者が58.3%。
「酒で失敗したことがある」と回答した者は、飲む回数が増えると増加。



2 収入と仕事

【1か月の収入は3万円未満が7割】

1か月の収入金額（勤労収入とそれ以外の収入を合わせた金額）は、3万円未満が66%に増加。



【年金の状況はわからない者が3割】

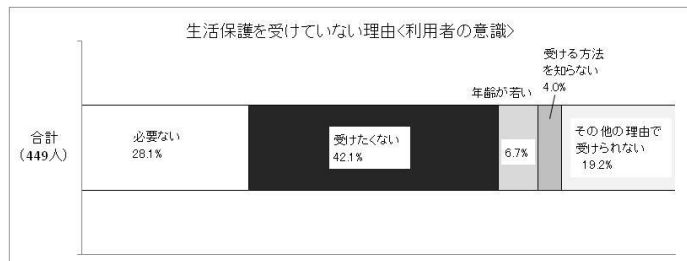
年金の状況については、「受給中」と「受給権があるが受給年齢に達していない」を合わせても1割。
ただし、「わからない」と回答した者が3割弱。

【生活保護受給中は1割強】

生活保護を「受給中」と回答した者は90人で、全体の13%。

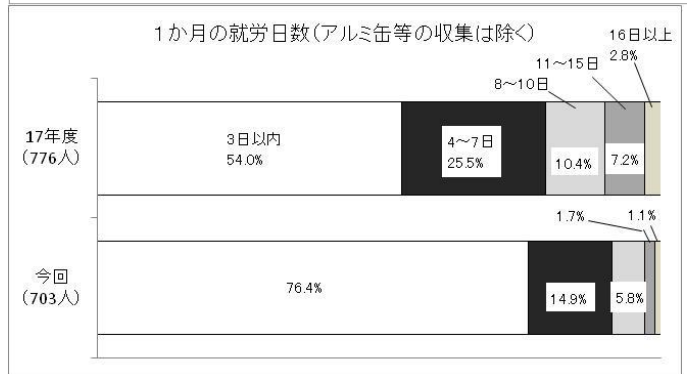
【生活保護を受けない理由は「必要ない」「受けたくない」が合計7割】

現在生活保護を受けていない理由は、「受けたくない」が多いが、年齢の問題や受ける方法など、制度理解が不十分な面も見られる。



【働けるうちは自分で頑張りたい】

「受けたくない」理由は、「働けるうちは自分で頑張りたい」が半数を超えている。

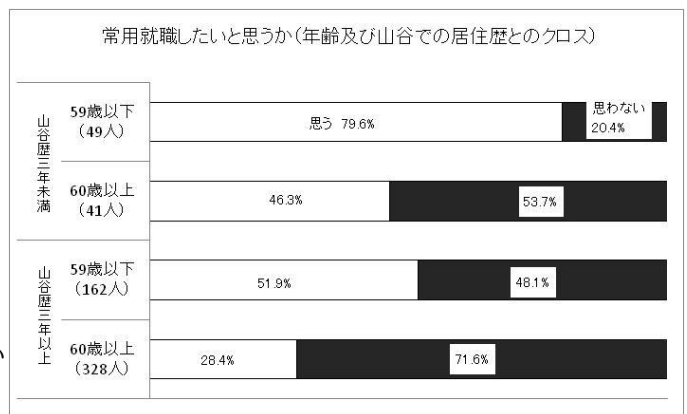


【就労日数は月3日以内が4分の3】

1ヶ月の就労日数は3日以内が4分の3を占めており、17年度と比較して20ポイント以上増加。

【7割が民間就労に従事できず】

就労の内容は、7割が都や区の公共事業のみに従事しており、民間就労できていない。



【常用就職への意向】

常用就職したいと回答したのは4割。若い人ほど、また、山谷居住歴が浅い人ほど、常用就職への意欲が高い。

3 今後の要望など

【センターに望むこと】

「日雇労働の紹介」や「宿泊・給食など応急援護の充実」が引き続き多いが、生活保護や住居にかかわる要望も増えている。

| | 集計 | 割合 | 有効回答数 |
|----------------|-----|-------|-------|
| 日雇労働の紹介 | 336 | 48.3% | 696 |
| 定職に就くための支援 | 88 | 12.6% | 696 |
| 宿泊・給食など応急援護の充実 | 210 | 30.2% | 696 |
| 医療の充実 | 97 | 13.9% | 696 |
| 生活保護受給に向けた支援 | 162 | 23.3% | 696 |
| 住居にかかわる支援 | 176 | 25.3% | 696 |
| その他 | 132 | 19.0% | 696 |

※2つ選択

【老後は民間アパートや都営住宅】

「老後はどこで生活したいか」では、民間アパートや都営住宅という回答が多く、簡易宿所は2割弱。

| | 集計 | 割合 | 有効回答数 |
|------|-----|-------|-------|
| 仕事 | 543 | 69.1% | 786 |
| 宿泊援護 | 175 | 22.3% | 786 |
| 給食援護 | 118 | 15.0% | 786 |
| 交通費 | 36 | 4.6% | 786 |
| 医療 | 100 | 12.7% | 786 |
| 生活保護 | 75 | 9.5% | 786 |
| 住居 | 107 | 13.6% | 786 |
| その他 | 110 | 14.0% | 786 |

※2つ選択

【今後も山谷で生活したいが5割】

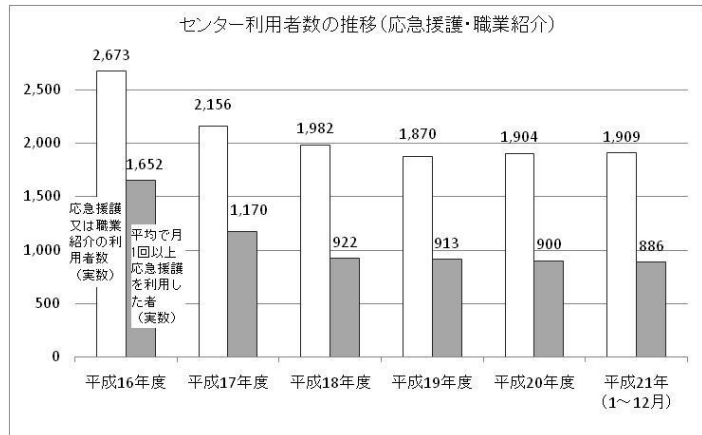
今後も山谷地域で生活したいと思う者が 53.9%。年齢が高く、山谷居住歴が長いほど、思うと回答する割合が高くなる傾向がある。

Ⅲ センター利用者の増加・減少要因分析

【全体の利用者数は減少傾向だが、最近は下げ止まり】

平成 21 年は平成 16 年度と比べて、1 年間の利用者数の実人数及び平均で月 1 回以上応急援護を利用した人数とも 760 人ほど減少。

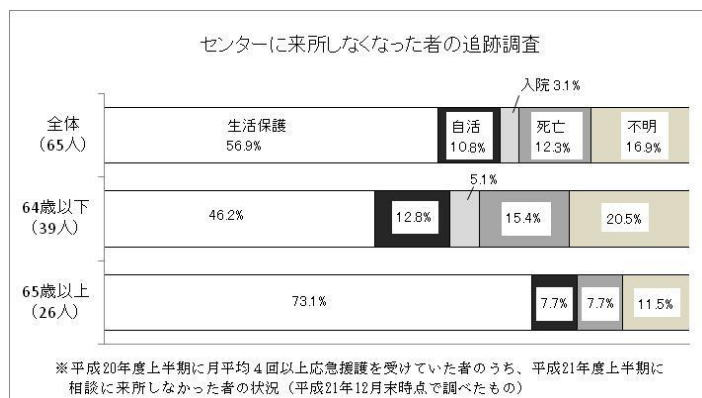
ただし、ここ最近は下げ止まりの状況も伺える。



【センターに来所しなくなった者の半数以上が生活保護へ】

平成 20 年度上半期に月平均 4 回以上応急援護を受けていた者 (354 人) のうち、平成 21 年度上半期に 1 度も相談に来所しなかった者 (65 人) の原因は、生活保護 (57%)、死亡 (12%) など。

65 歳以上の者に限ると、生活保護の割合は 73% まで上昇。

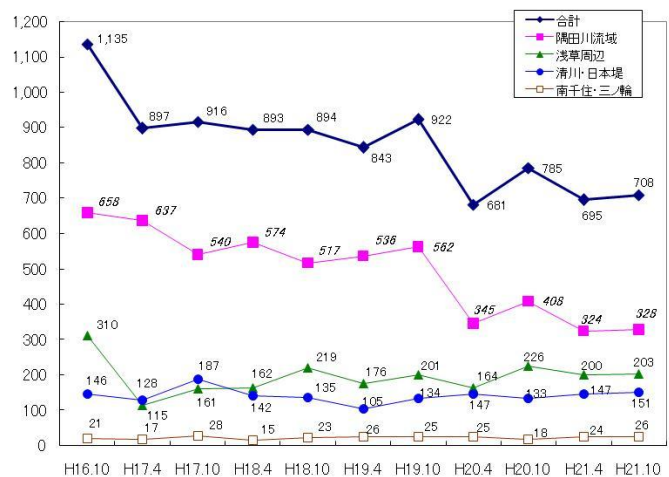


【山谷地域への大規模な流入は見られない】

山谷地域及び周辺の野宿者数は、平成 20 年 10 月には一部で増加したが、平成 21 年 4 月には減少に転じており、10 月もそれほど増えていない。

リーマンショック以降、景気後退の影響により、センターを新規に利用する者が増え、その影響で利用者の総数は下げ止まりの状況が現われているが、それは高齢者が中心で、他の地域から若い人が大量に流入しているわけではない。

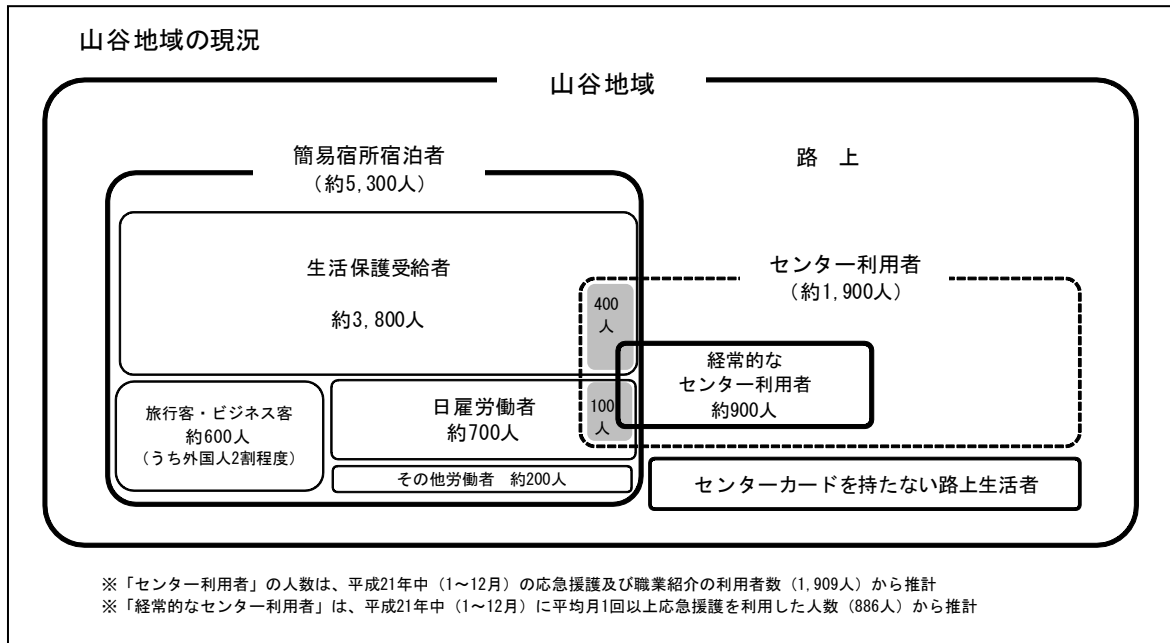
野宿者数の推移(センター野宿者調査)



IV 調査結果の今後に向けた活用

【山谷地域の全体像～簡易宿所にいる日雇労働者が減少～】

今回の調査のほか、センターによる簡易宿所アウトリーチ等の状況から推計できる山谷地域の全体像は次のとおり。



【生活安定・自立促進に向けたより効果的な利用者支援】

(1) 就労自立に向けた支援

- ・常用就職に向けて労働者ごとに状況を見極め、より効果的な支援を行うことが求められる。常用化を促す就労自立支援事業はこれまでの実績を踏まえて、訓練や支援の内容、人数など見直しを行っていくことが必要。
- ・常用就職相談については、利用者に対して常用就職に向けた努力を促す相談にするための仕組みづくりが必要。

(2) 稼働能力を最大限活用した生活安定

- ・就労のみでは生活安定が困難な利用者に対して、本人の稼働能力を最大限活用した就労の安定化と、必要に応じて福祉部門との連携を図り、働きながら必要な範囲で福祉施策を利用した生活を可能にすることが、生活安定にとって効果的。
- ・地元の区などの関係機関や関係民間団体と連携しながら、こうした利用者に対する支援の協力体制のあり方について検討していくことが必要。

(3) 就労が困難になった利用者の生活安定

- ・生活保護をはじめとした福祉施策によって生活の安定を図ることになった利用者が、再び野宿生活に戻らないよう、どのようなフォローが可能か、区や関係団体と検討する必要がある。
- ・山谷地域を転出して生活の安定を図ることになった利用者に対して、安定した生活に移行するまでの一定期間に限ったフォローを検討する余地がある。

【安心で快適なまちに向けて】

- (1) 簡易宿所に宿泊するセンターを利用しない日雇労働者のセーフティネット
 - ・支援が必要となった労働者を早期発見できるように、日雇労働者が宿泊する簡易宿所を訪問し、状況把握の継続といつでも迅速に帳場と連絡を取り合える関係の維持に努める必要がある。
 - ・簡易宿所に宿泊している日雇労働者の通院率が高くない状況を踏まえ、医療や福祉につなげる必要がある者を早期に発見し、迅速につなげられるよう、現在行っている健康相談をより効果的な方法で継続実施していくことが必要。
- (2) 住みやすいまちづくりに向けた取組
 - ・地域住民等と連携した環境改善の取組は、着実に成果が現われてきている一方で、高齢化を踏まえ、NPOが運営する宿泊所が複数開設されたほか、簡易宿所ではビジネス・外国人旅行者が増加するなど、山谷地域は大きく変貌している。
 - ・センターでは今後も各種事業などを活用して、まちづくりに貢献していく。

第2部 娯楽室・敬老室調査

I 調査の概要

(1) 目的

娯楽室・敬老室利用者の実態を把握し、今後の施策の参考に資することを目的とする。

(2) 実施日時

娯楽室：平成21年11月26日（木曜日） 午前8時40分から10時まで

敬老室：平成21年11月27日（金曜日） 午後1時から2時まで

(3) 調査方法

調査票による記述式調査

(4) 調査回答者

娯楽室利用者：150人

敬老室利用者：33人

II 調査結果

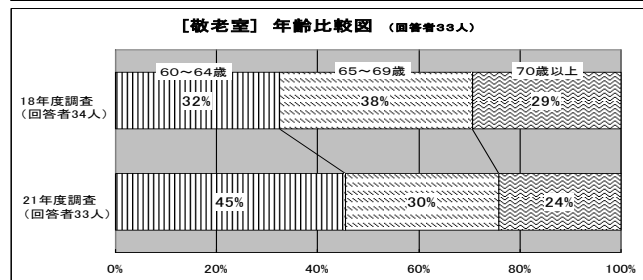
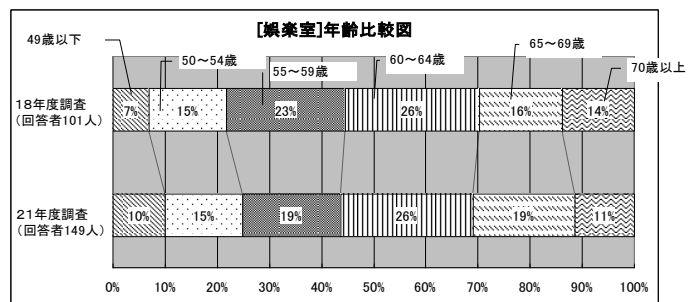
【娯楽室では49歳以下が増加】

娯楽室では、60歳以上が過半数を占める一方、49歳以下が10%と18年度調査から若干増加。

60歳以上が利用対象の敬老室では、64歳までの年齢層が増加。

【娯楽室の利用目的は様々】

娯楽室では、「室内の各施設・サービスを利用したい」「暑さ・寒さ・雨降りを避けたい」のほか、「外に行くところがない」という回答も多い。

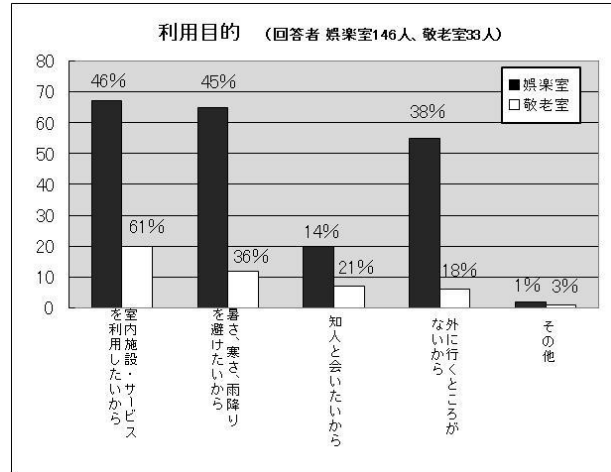


敬老室では、「室内の各施設・サービスを利用したい」と回答した者が多い。

【テレビコーナーが人気】

主に利用しているものは、娯楽室では、「テレビコーナー」「ラーメンコーナー」がそれぞれ6割。

敬老室では、「テレビコーナー」が6割、「シャワー」が5割。



【日常的に利用している者がほとんど】

利用頻度は、娯楽室、敬老室とも、「ほぼ毎日」と「週2～3回」を合わせると9割超が日常的に利用。

【敬老室利用者は滞在時間が長い】

滞在時間は、娯楽室では、「30分～1時間程度」から「一日中」まで各選択肢に偏りなく回答が見られる一方、敬老室では、半日以上利用している者が7割超。

【娯楽室と敬老室の利用者は重ならない】

娯楽室について、敬老室利用者に質問したところ、「ほとんど利用しない」が6割超。

【センター利用者カード等所持状況】

娯楽室では、6割がセンター利用者カード所持、3割が玉姫白手帳所持、いずれも持っていないが3割。敬老室では、いずれも持っていないは2割。

【生活保護を受給しているのは、娯楽室では2割、敬老室では4割弱】

生活保護受給中の者は、娯楽室23% (18年度17%)、敬老室36% (18年度38%)。

【娯楽室では近年山谷地域に流入してきた利用者も一定程度いる】

山谷地域居住歴は、娯楽室では、10年以上が40%である一方、1年未満も22%と多く、近年山谷地域に流入してきた利用者層の存在が伺える。

敬老室では、10年以上が半数超で、山谷地域の居住歴が長い傾向が見られる。

【野宿率は娯楽室7割、敬老室5割】

居住形態は、娯楽室では、「野宿」が72%、生活保護受給者を除くと88%。

敬老室では、「野宿」「テント・小屋掛け」が5割である一方、「簡易宿所」が3割。

【敬老室では求職活動をしていない者の方が多い】

求職活動は、娯楽室では「している」が6割超。敬老室では「していない」が約6割。

【勤労収入は3万円未満が大半】

収入金額は勤労収入に限ると、3万円未満が娯楽室では80%、敬老室では74%。

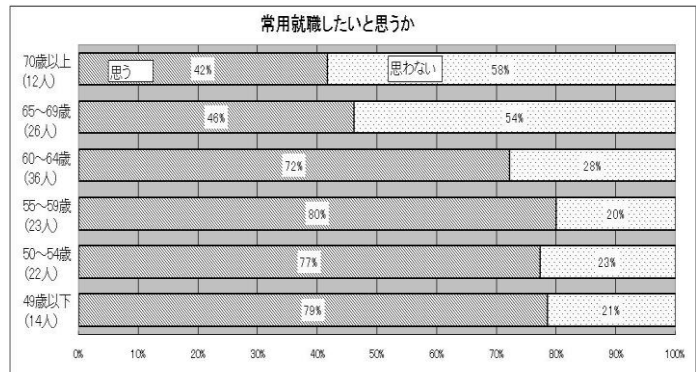
【常用就職したいと思うのは娯楽室では7割、敬老室では4割】

常用就職したいと思うと回答したのは、娯楽室では68%、敬老室では41%。

Ⅲ 娯楽室利用者の傾向

【年齢が若いほど常用就職への意向が強い】

年齢が若い層ほど、常用就職したいと思っており、同様に、求職活動をしている者も多い。
生活保護を受給している者は、70歳以上になると半数超と多くなる。
居住形態は、「野宿」は若年層に多いが、生活保護受給者を除くと、年齢にかかわらず多くなる。



【常用就職への意欲と山谷居住歴】

常用就職したいと思う者は、概ね居住歴が短い層ほど多い。

【センターの利用者カードを持っている方が野宿率が高い】

野宿率は、センターの利用者カードや玉姫労働出張所の白手帳を持っている利用者の方が高く、日雇労働がなく収入も少ない状況が伺える。

山谷地域居住歴は、いずれのカード等も持っていない利用者の方が、1年未満の割合が高い。

【娯楽室を最もよく利用しているのは山谷居住歴の長い日雇労働者】

娯楽室を「ほぼ毎日」かつ「一日中」利用している者の特徴は、「生活保護を受給していない」、「センターの利用者カード等を所持している」、「山谷地域居住歴が長い」。

Ⅳ 敬老室利用者の傾向

【一時利用者層、常時利用者層、中間層に分類】

特徴として、一時利用者層は求職活動を行っており、常用就職への意欲が比較的高く、多くは生活保護を受給していない。敬老室の利用では、シャワーや洗濯といった生活に直接関連する設備を利用している者が多く、利用時間は2～3時間から半日程度。常時利用者層は、求職活動を行っておらず、常用就職も希望していない上、生活保護受給者が多い。敬老室の利用では、一時利用者層ではほとんどなかった将棋や囲碁といった娯楽的要素が目立ち、利用時間は半日から1日と長い。

中間層は、両者の特徴的な部分が混在している層。

利用者層の区分は、年齢との関係はあまり見られなかった。